



伊藤博文

同市におけるメソジスト教会に金貨百ドルを寄附せられることになった。この教会は、従来日本人のためにつくしてあるところが多かったからである。

翌五月二十日午後二時、伊藤侯一行はヴァンクーヴァーを出発して「モントリオール府」に向う。このときカナダ政府は歩兵を派遣し、軍楽を演奏して伊藤を駅まで見送った。

ロッキー（落機）山脈を越えて

ヴァンクーヴァー市の遠景が霧におおわれて見えなくなると、やがて列車は黒煙をみなぎらして山奥深く進んでいく。深い林を出たと思つと、重々とした峯の雪を眺め、また青々とした荒野をすぎる。

この「限りなき風光に迎接して、無量の空想は胸に浮びぬ。」やがて百マイル、山はいよいよ深く、山岳の美はいよいよもない。松本をして「吾れ天下を周遊して好山明水を観取せしことの少なからずといえども、いまだかつてかくの如き奇絶の山水に遭遇せしことなし」と叫ばせるのもうなずかれる。一夜あけても、なお「吾

が汽車は世にも名高き北落機（北落機）の山脈奥深く進み行く」のであった。安楽椅子にシガーをくゆらせながら風景を楽しむ、文明の世の有りがたさを味ううちに、ロッキー第一の高峯シルキルクをのぼろうとする。山腹にクレイア・ハウスの駅があり、木造のホテルもあって、乗客はみな列車を降りてそこで食事をした。やがて平原に下ればドーナルド駅となり、風景は平凡なものとなる。

オタワでの歓迎

松本君平は伊藤一行がオタワについて正確な日取りを記していないが、二十三日ではなかったか。当地で見たイーヴニング・ジャーナル（六月十二日付）の「伊藤侯爵」という困い記事によれば、列着は女王の誕生日というから、五月二十四日である。とすれば二日位早すぎるが、或いはそれは誕生祝日であったかもしれない。とにかく、駅頭には儀仗兵がならび、スコット、ドーベル、フィッシュャー、ジョリーの諸氏が自治領政府を代表して出迎え、キャプラン・アースキンが総督の代理でこの賓客を迎えた、と同氏の記事にある。松本によれば、高官およそ十五、六名が駅に来て歓迎したという。市民は黒山のように集って「東洋一の政治家」を見ようと先を争った。新聞はいたるころ伊藤侯の来遊を歓迎する記事を書いた。伊藤は時間の関係上、ただちに馬車でリドー・ホールに総督アバディーン卿を表敬訪問する。総督は喜んでこれを迎え入れ、特に伊藤のため茶会を催し、政府の頭官在野の政治家が大勢集った。総督は六十歳くらい、温厚誠実な「盛徳の君子」たるを知る、と松本は書いている。あた

かもカナダ議会が開会中であつたので、伊藤侯は案内され、あわただしい訪問をすることになり、議事を視察し、院内のライブラリー、議員室なども案内されて見学した。

「カナダ大守を訪う、国際上の常典、政治家の交誼に過ぎざるのみ。然れども侯の名声つとに四海に馳、憲法の草案者新日本の大政治家として、児童走卒といえども知らざるものなきほどなるが故に、今特にこの郷に入り来て礼を大守に報ゆるや、大守が侯に酬ゆるのいよいよ盛んなる所以のもの、あに偶然ならんや」というわけで、先を急ぐ伊藤一行はオタワに滞在せず、見送りの人々に告別して、当日六時オタワ駅を出発する。松本によれば、この時ローリエ首相が「侯を送つて共に停車場に来れり」となっているが、そのことは見たかぎりでは現地の新聞には出ていない。しかし、当夜の十時にカナダ第一の都会「モントリオール府」に到着、十時半にはウインザー・ホテルの第一階の食堂で夕食をとっていたことはたしかである。ウイルフリッド・ローリエ首相が六月五日、ニューヨークから汽船ルシアニアでロンドンに向つたあとを追つて、六月九日伊藤もまたフランス船ガスコンでフランスを経て東京に向う。その船中いくつかの漢詩をものにしてはいるが、ここでは触れる余裕がない。

以上の記事から、カナダ政府当局がこの明治政府の舵取りに対して相当の歓迎ぶりを示したことが十分にうかがえる。さて、こうして伊藤一行のカナダ旅行は終わったが、そのころのオタワがどんな風に見えるか、松本君平の冊子でみてみよう。

「オタワ府はカナダの首府にして、政府の在る処、大守ガバナー・ゼネラルの駐留する処なり。人口五万を有し、オタワ河とリデュウ河の中間にありて風光頗る佳なり。水利の便多きを以て水力の利用甚だ盛んなり。オタワ河の上流より木材の流出するものみな此の地に陸揚げして、以て各地に材用の供給を計れり。」

「市府は二部に区分せられ、一を上区といい、一を下区と名づく。地位高原にあるを以て一望千里、カナダの平原は眼底に落ち来る。市民の居宅邸みな莊麗にして閑雅なり。政府の建築物最も莊大を極む。」

「オタワは：カナダの政治上の中心にして、商業上の中心点は実にモントリオール府にあり。米國、カナダ兩國の相類似せるもの甚だ多し、けだし米風の感化然らしむる処あるか。」

最後に、伊藤と同じ船で日本から帰国したカナダ人のトマス・ウィットリーという人が、前掲の新聞に、日本について、また伊藤について書いていることを一、二つけ加えておく。かれによれば、伊藤侯は英語を流ちょうに話すばかりか、適格に書く。その書体はカナダのビジネス・カレッジの教授が書いたといつてもおかしくない。常にステノ兼タイピストを滞回しているそうである。日本については高い教育と文明をもつ進歩的な国民で、ロシアと戦う準備をしているというにはちよつと驚かされるが、また日本人同志ばかりでなく、外国人に対して非常にいいねいだといっている。その点は、これは今日読むカナダ人のなかに驚く人もあるのではないか。